

TANKA 短歌

2006(平成18)年10月30日鑑賞〈東映試写室〉

★★★



監督・脚本＝阿木耀子／原作＝俵万智『トリアングル』(中公文庫刊)／出演＝黒谷友香／黄川田将也／村上弘明／中山忍／本田博太郎／高島礼子／西郷輝彦／萬田久子(東映配給／2006年日本映画／102分)

……モデル出身の美女黒谷友香の初主演作は、年上の男性との不倫と若い彼氏との刺激的な愛の中を生きるヒロインを官能美タップリに描くもの。監督初作品となる阿木耀子が、俵万智の原作を活かしながら、女性の目で大胆に描くセックスシーンは見モノで、体当たり演技に挑戦した黒谷友香には、今後一皮も二皮もむけてもらいたいもの。しかし、同じモデル出身の美女伊東美咲に続いて大ブレイクするには少し力不足……？

作詞家、女優、作家プラス監督！

この映画は宇崎竜童の奥さんである阿木耀子の初監督作品。1975年に『港のヨコ・ヨコハマ・ヨコスカ』で作詞家デビューした彼女は、映画にも時々出演しており、決してうまいとは思えないが十分存在感のある女優として立派な役割を果たしている。そのうえ、作家としての著書も多数。そんな才能いっぱいの女性だから脚本を書けるのは当然だろうが、何と驚くべきことにこの映画で監督業にまで進出！

この映画は俵万智の原作をうまく活かすとともに、薫里^{かおり}(黒谷友香)という33歳の女性の生き方を、2人の男性との赤裸々な性関係に焦点をあてて描いているが、そこには女性監督らしい視点や心配りがいっぱい。天は1人の人間にいろいろな才能を与えることがあるものだと痛感……。

やっとめぐってきた初主演だが……

黒谷友香は『忍 SHINOBI』(05年)では全身が毒でつくられている美女陽炎役をやっていた(『シネマルーム9』162頁参照)が、コマーシャルによく登場する美女であるわりにはこれという特徴がなく、今日まで大ブレイクしなかった女優で、同じようなモデル出身の美女伊東美咲のブレイクぶりと好対照だった……。

そんな黒谷友香にやっと待望の初主演作が舞い込んできたが、最初はハードなセックスシーンに怖じ気づいたはず。しかしそこは、女性監督が美しく撮ってくれるだろうとの信頼の下(?)、次から次へと美しい全身ヌード姿を見せながら、激しいセックスシーンに挑戦……。といっても、後述の杉本彩や坂上香織の激しさとは段違い……?

さて、この程度のヌードとセックス挑戦で、彼女が一皮も二皮もむけて主演作続出となるかどうか? それは彼女の努力次第だが、私にはどうももうひとつオーラが不足しているため、主演女優を張り続けるには力不足と覚えてしまったが……。

女性監督の方がセックス描写は大胆……?

阿木燿子の初監督作品はR-15指定。そりゃそうだろう。映画の冒頭から何とも刺激的な、年上の妻子あるカメラマンM(村上弘明)と薫里との絡みが……。杉本彩主演の『花と蛇』(04年)、『花と蛇2 パリ/静子』(05年)や坂上香織主演の『紅薔薇夫人』(06年)などは明らかに男性客目当てのSM映画だったが、この映画は若い女性向けの官能映画……。チラシやパンフレットには、冒頭の絡みの様子がポルノ小説以上に(?)官能的に表現されているが、その実際の姿はあなた自身の目で確認を……。

私が驚いたのは、Mとのセックスライフで十分充実していると思っていた薫里が、かなり意識的にバイオリン奏者の若い圭(黄川田将也)とのセックスを求めたこと。パンフレットには「年下の圭の初々しさに惹かれ、自然の成り行きで体を重ねる」と書いてあるが、スクリーン上の展開を見ていると、誰がどう考えてもこれは薫里の計算づくのストーリーに圭がハマったとしか思えないもの……。

それほど女はしたたかだということ(?)だが、こんな「掛け持ち」を平気でやれる33歳の主人公に拍手……。しかしそれにしてもやはり、女性監督の方がセックス描写は大胆……?

あなたは薫里派それとも美佳派……?

男に頼らず独身のフリーライターとして生きながら、一方で年上の妻子ある男性と不倫関係を続け、同時に年下の若者ともセックスライフを楽しむ薫里は、ある意味で今ドキの理想的な女性の生き方……? まあこういう生き方ができるのは、ライターとしての能力が編集長の小田切(本田博太郎)にきちんと認められ、一定の収入が見込まれることと、女性としての美しさと魅力を備えていることが大前提……。しかしそんな薫里であっても、ある一定の年齢になると、またMや圭との関係がギクシャクし始めると、「このままでいいのだろうか……?」と不安にかられ始めるはず。今はMとの関係もいい状態だが、いつまでそれが続くのかはかなり不安。現にこの映画の後半はそれが1つのテーマとなり、薫里の心は揺れ動くことに……。

他方、それと対照的な女性が薫里の友人の美佳(中山忍)。美佳は結婚し子供を望んでいるがなかなか恵まれず、現在は不妊治療を含めて鋭意努力中……。女同士のセックス会話の露骨さには驚くが、美佳にしてみれば、薫里は親友だが同時に女の敵、妻の敵となるらしい……。そんな妻の気持を代弁し、「妻代表」として薫里に食ってかかる姿を見ていると、「そこまで言わなくても……」と私などは思ってしまうが、女同士の会話はトコトンまでいくよう……。そんな会話を聞き、また対照的な2人の女性の生き方を見て、さてあなたは薫里派それとも美佳派……?

ベリーダンスは女性の官能美の象徴……

この映画は、阿木耀子らしい感性で女性の官能美の象徴として最近はやりのベリーダンスを取り入れているが、その音楽を担当したのが宇崎竜童。パンフレットによれば、ベリーダンスは「エジプト・トルコ等、アラブ全域で踊られる女性による即興のダンス。腹部や腰をくねらせて踊るため、欧米ではBelly(=腹部)

Dance と呼ばれている」と解説されているが、その音楽を彼がいかに魅力的につくり出しているかにまず注目！ そして次に、プロのダンサーたちに負けじと黒谷友香がこれに挑戦していることにおじさん族としては大いに注目……。

圭と別れ、「お友達に戻れない？」と提案した薫里に対して、圭が最後に「もう1度だけ」と体を求めるシーンがあり、これには苦笑いせざるをえなかったが、その後のベッドシーンが見モノ。若いくせに圭は最近イザという時に役に立たなくなるのが……。これは薫里との将来についての精神的な不安が肉体に影響するためだが、勢い込んで求めたにもかかわらず、最後の思い出とするためのチャレンジも途中で挫折……。そんな圭を性的に刺激するため、薫里がオールヌード姿で薄い布をまといながら踊り始めたのが、スローテンポでエロティックなベリーダンス。さて、それを見た圭の男性機能は見事に回復するのだろうか……？

男関係の充実度は仕事の充実度と正比例……？

M と一緒に取材旅行に行ったことが契機となって、長年いい不倫関係（？）が続いているわけだが、男関係が充実していれば、それに正比例して仕事も充実……？ これは薫里だけではなく、どんな女性でも同じ……。そんな M との充実度の上に、若い圭の「つまみ食い」が同時並行的に入ったのだから薫里の充実度はさらに拡大……。ところが、若い圭は、新鮮なうちはよかったものの、「両親に紹介したい」「結婚したい」とまともに言い始めると、薫里にとってそれは「え、それは少し違うでしょう……」と言いたくなるもので、こうなると圭の存在がうっとうしく思えてきた……。他方、M との関係においても、薫里に代わる若い女性助手との仕事が増えてくると、自分でも意外なほど嫉妬心が生まれてきたり……。こうなると、男関係も仕事も自信満々で生きてきた薫里の人生も多少ピンチに……。

大先輩の圧倒的な存在感は……？

珍しく仕事上のミスを犯した薫里は、ライターとしての能力を高く評価してくれていた編集長から叱られると共に、「お前の最近の文章はキレがないぞ！」ときつい警告を……。そんな落ち込んだ精神状態の下で臨んだ仕事が、芸能界の大

物女優大里響子（萬田久子）の取材。プロとしてのしっかりとした自覚を持って芸能界を生き抜き、今なおカメラの前に立つと美しく華やかなオーラを放っている大里の姿に思わず「キレイ！」と声をあげた薫里だった。そのうえ取材の中、大里がシングルマザーとしてどんな生き方をしてきたのかに触れていくとさらに感心……。子供を産んでも、またこんな年齢になってもこんなすばらしい生き方をしている女性がいる、そんな存在感に圧倒された薫里の生き方にはこの日以降、明らかに違う面が……。

その結果、圭に切り出したのが、前述の清算話というわけだ。それはそれでよくわかるが、他方、Mとの関係は……？ その方向性については、①従前通り継続、②段階的縮小、③この際思いきって清算、の3通りだが、さて薫里の選択は……？

このラストは一体ナニ……？

圭とは「友達」になることを合意させたうえ、Mとの関係もどうやら自然消滅の方向に向かっていく感じ……。さてそんな中、33歳の女ひとり、これからどのように生きていく方針を固めるのだろうか……？ そう考えながら私は映画の結末のつけ方に注目していたが、それはアッと驚く意外なものだった。さて、そのラストとは……？

私は「一体これはナニ……？ 阿木燿子監督それはないよ！」と大いに不満だが、さてあなたは……？ 今から約20年ほど前、子連れで職場に現れたアグネス・チャンへの賛否両論が社会問題となり、「アグネス論争」を巻き起こしたが、この映画の結末を観ると、まるで阿木燿子監督の意図とは関係なしに「アグネス讃歌」に結びついてしまいそうだが……？

2006（平成18）年10月31日記